

---

# チェンジ！

吉武 和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チエンジ！

### 【Nコード】

N2743Y

### 【作者名】

吉武 和

### 【あらすじ】

近年、日本特有の犯罪が増加した。  
その名もエイブル。

エイブルとは、一部の日本人のみが使える異能の力で第六感や念動力、中には気候を変えたりするものもある。

人々はその力を持つものを能力者と呼んだ。  
エイブラー

そして、青空つばさもまた能力者<sup>エイブラー</sup>だった。

## 悪夢（前書き）

この作品は、中三の頃授業の合間を縫って初めて完結させた作品です。

個人的には、俺が書いた中で一番好きです。

お楽しみできたら幸いです。

## 悪夢

ああ、これはいつぞやの夢だ。

小さな僕の頃の夢だ。

夢と言っても将来の夢とかでは無く寝ているときに記憶を整理する方だ。

今日もまたあの悪夢を見るのか。

いつも通りに僕の意識は、更に深いところまで沈んでいった。

20××年3月31日

「とあるマンション」

雨の強い日、三歳程の男の子は機嫌を悪そうに二人用のテーブルの前に座っていた。

なぜ機嫌が悪いかは男の子の視線を追えば簡単だった。

男の子は、一心にテーブルの上に置かれている、ウサギの形に切り取られた人参を睨みつけていた。

そう、見ての通り男の子は、人参が嫌いであった。

男の子の皿には、人参以外残されてはいない。

「もう、つばさちゃん。人参を食べないと大きくなれないわよ」

「いらぬもん。まずいもん。人参！」

何を思ったのか、つばさもとい幼き頃の僕は、目の前にある皿をひっくり返す。

「…！つばさちゃん。ちゃんと食べなさい…！」

母さんは、ぴしゃりと僕を叱る。

「ばか！ママのばか！」

幼児にしては素早い動きで母さんは声をかける間もなく寝室へと逃げ込んだ。

母さんは何も言わず、人参や割れてしまった皿などを片付ける音だけが聞こえる。

（ママが悪いんだ。食べたくないのに食べさせるから…）

心の中で、自分を正当化しようと、言い訳をしようとする僕。

そうしていること数分、突然、玄関のドアが破壊される音が聞こえた。

反射的にビクッと体が跳ね上がり布団の中に入り縮こまる。

母さんと何者かの争う声が聞こえる。

怖くて何もできず、僕は必死に外の世界に目を背けた。

耳を塞ごうと腕を動かそうとした時、音は激しさを増した。

(……………ママ)

僕は、布団から立ち上がりドアから出って母さんに気をとられている男の方に突っ込んでいく……

そこで今日もまたあの夢は終わる。

そして、今日もまた始まったのだ。

20xx年、3月30日あれから8年後

「んう。またか……」

僕は、無駄に広い部屋のベッドで起きた。

そこは、殺風景な場所が必要最低限のものしか置かれていない。

目覚ましに目をやると、時刻は午前3時丁度だった。

「そろそろ行かなきゃいけないな」

ベッドの近くにあるテーブルから生地の良いさそうな黒の手袋をはめて僕は、部屋を後にした。

冬の名残なのか当たりはまだ薄暗く肌に当たる冷たさは僕に春はまだ来ない、とでも言いたそうだった。

僕は、屋敷の中にある母のお墓の前に柄杓を置き、しゃがんで手を合わせた。

ある程度した後、持ってきた百合の花を供える。

母は、百合の花が好きだった。

今日は、死んだ母の命日…

例年通り僕は、母に近況報告をする。

最後に、「僕は、元気だから墓から出ないように」と注意して立ち上がった。

少しだけ足が痺れていたが大して気にせず柄杓を片手に立ち去った。

(帰ってまた寝よう)

僕は、柄杓を片付け屋敷へと帰った。



## 悪夢（後書き）

どうでしたか？

面白かったですか？

できたらいい点や悪い点や感想などおっくってくれるだけで俺はとて  
もううれしいです。

ぜひ送ってください。

待ってます。

これから2〜3日一回投稿する予定です。

## 幼馴染（前書き）

読んでくれてありがとうございます

## 幼馴染

とある屋敷に僕は、引き取られた。

その屋敷は、当主が一人、幼馴染が一人、ドライバーが一人、ボーイさんとメイドさんが多々あり。

そこに僕という構成だった。

かなり大量にいる。

言つての通りかなりの大規模の屋敷だ。

そんな中場違いの僕は住んでいた。

20XX年3月31日 午前7時半

「はあああああ」

背筋を思いつきり伸ばし万歳をすると同時に僕はベッドの上から辺りを見渡した。

僕の視界には、ただ殺風景な景色しか映らない。

そんな光景にホッと息をなで下ろした。

しかし、手に感じる温度が現実は甘くない、と語ってきた。

(右手が上がらない!?)

空いている左手で顔を抑えたため息をつく。

8年間ずっとそうだが、この子は何で僕の部屋に入ってくるんだろ。どうやら左手は両手で捕まえられているようなので、左手を伸ばし少女を…あかりちゃんを揺さぶった。

「あかりちゃん。起きて」

返事はない。

寝ているのか？

いや、そんなはずはない。

八年もの付き合いだ。嘘寝かそうじゃないくらい幼馴染の僕には分かる。

もう一度揺らす。

「あかりちゃん起きてるだろ？」

「……………」

まだ嘘寝を突き通す気だ。

「あかりちゃん。そろそろ起きてくれないと、僕…怒るよ」

それでもあかりちゃんは、寝たふりを突き通す。

しようがない最後の手段を使うか…

僕は近くのテーブルに手を伸ばし四角の形をした物体についているスイッチに手を止める。

これは呼び鈴だ。

これを押すとばあやさんが飛んでくる。

「おきないと、ばあやさんを呼んじゃおうかな〜」

わざとらしい口調で僕が言うと

「わ、分かった。ちょっとタイム。それだけは…」

ベットから憩よく飛び出して来た。ピンク色のパジャマを着た幼馴染は慌てふためいていた。

薄紅色の紙に、赤ベースの紫色の目をしたかわいらしい少女が僕の幼馴染のあかりちゃんだ。

「じゃ、毎晩毎晩、来るのやめようよ」

僕は、泣き言のように言うのに対してあかりちゃんは

「だって、つばさ君の隣は心が暖かくなるからね」

あまりの言い草に赤面してしまふ。

ほんとううれしいことを言ってくれるよ全く。

早々ひとつ言い忘れていたことがある。

僕とあかりちゃんは一ツ屋根の下で一緒に住んでいるが兄弟ではない。

僕とあかりちゃんはただの幼馴染だ。

訳あって僕には親がない。

身寄りのない僕を引き取ったのが夕焼け財閥だった。

「でも、流石に僕らが一緒に寝るのはどうかと思うよ。あかりちゃんはアイドルでもあるんだから」

「別にいいよ。あたしは」

返事はとても軽い物だった。

仕方ない。

幼馴染であると同時にマネージャーの僕は今日の予定を読み上げた。

幼馴染（後書き）

感想をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2743y/>

---

チェンジ！

2011年11月10日08時14分発行